

塵の都に

高井有一



明治の文人、齋藤
緑雨の死を目前に
した最晩年の生涯
。その緑雨の
光に照らされて、
鮮かに浮き彫りに
される現代の男と
女、その生と死。
著者の新境地を開
く力作長篇小説。

講談社刊／定価一五五〇円

(本体一五〇五円)

講談社

塵の都
高井有一

ちり みやこ
塵の都に

一九八八年五月一〇日 第一刷発行
一九八九年四月一五日 第二刷発行

著者——高井有たかい ゆういち一

© Yūichi Takai 1988, Printed in Japan.

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京三—五—三二（大代表）

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——黒柳製本株式会社

定価——一五五〇円（本体一五〇五円）

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。

送料小社負担にてお取替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第一出版部あてに願いたします。

目次

i	伐られた樹	5
ii	寒い晩	31
iii	御在所岳	62
iv	死の前後	95
v	墓地へ	119
vi	酔ふと眠ると	151
vii	才能について	185
viii	魚の血に悲まず	221
後記		251

装
幀

司

修

塵の都に

i
伐られた樹

小路を出外れた角の家の庭に、櫟の大木がある。つい二年前までは、大谷石を積んだ塀越しに、通りの半ばを覆つて枝を張り、葉を繁らせて、夏の驟雨が降り過ぎるときには、そこだけが白く濡れ残つた枝の下へ、子供たちが集つて、盛んに声を立てて躁いでゐたものだ。しかし、その枝は伐られてしまつた。そろそろ葉の散りかける季節の朝の出がけに、私は、櫟の下の方路上に小型トラックが停り、作業員が荷台から何か道具を取り下してゐるのを見た。その日は帰宅が夜半になり、次の朝、門を出ると、小路の景色が昨日までとは違つて、丁字路の突当りの家の二階の窓に干してある蒲団の青い色が眼に入つた。櫟が失くなつた、

と私は瞬間思つたほどだ。枝は天辺のあたりを残して思ひ切りよく伐り落され、私の背丈の倍くらゐの位置から三つに岐れた幹が、裸となつて陽に照らされてゐる有様は、羽毛を筆り取られた鶏のやうであつた。

「どうもやり切れないな、あれは」

と私は、解説委員室で隣合せの席にゐる真柄桂三に言つた。

「あのまんま放つておけば、木は死んぢまふんぢやないか」

「文句を言ひ立てる奴がゐるからさ」

真柄は例によつて、即座に事を断定した。彼の声は大きい。八人が机を並べる部屋に、私たち二人しかゐるなかつた。

「俺の家は君のところよりずっと田舎だが、それだつて近所ぢやばさばさやられてるよ。落葉で庭が汚れるとか、樋が詰まるとか、うるさい奴が多いんだ。市役所は住民の迷惑になると称して、持主に伐れと勧告する。奴等は木が生きるか死ぬかなんて、まるで関心がありやしない。それでも他人の迷惑だと言はれちや、持主は逆らひ難いやな」

角の家の木が、果して真柄の推測したやうな理由で伐られたのかどうかは判らない。枝を落したあとの伐り口が黝ずみ始めるころには、私はその不様な恰好に慣れた。代りに、突当りの家の窓に人影が映らないかと、眼をやるのが癖になつた。

冬を越して翌年、樺は僅かな残りの枝に新しい芽を吹き、葉を付けた。だが、その葉の形は変つてゐた。以前よりも明らかに大きく、まるで桑の葉のやうに重なり合つて垂れ下つた。伐り残された大枝の一つ一つが緑の簑を被つたやうに見えた。

「木も一所懸命なのよ、可哀相に」

結婚して大阪に住んでゐる裕子が、たまたま遊びに来たときに言つた。この娘は今の家に私と一緒に住んだ事はない。

「木は葉つばがなかつたら生きて行けないでせう。その大事な葉つばが少ししかなくなつちやつたものだから、残つた分を無理に大きくして、お陽さまの光を吸収してるのよ。きつとさうよ」

「さうかも知らんなあ」

笑つて相槌を打ちながら、私は、妻が苦情も言はずに門の前の落葉を掃いてゐたのを思ひ出した。外廻りの仕事をする妻は、いつも洗ひ晒しの木綿のズボンを穿いてゐた。

私が長年の地方支局暮しを切り上げ、東京へ戻つて来て一年も経たぬうちに、妻は死んだ。蜘蛛膜下出血であつた。冬のさなかの寒い日、七時過ぎに歸つた私は、台所の流し台の前の床に、両腕を長く伸ばして倒れてゐる妻を発見した。俎の上に灰赤色の肌を光らせた眼張が二尾揃へて置かれ、流しに庖丁が転がつてゐた。夕飯の支度の最中に発作に襲はれて、

流し台の縁に捉まらうとしながら崩折れたのに違ひなかつた。風呂には湯がたぎつてゐた。

妻の葬儀のあと、友人や同僚は口ぐちに、一人遣された私の生活を心配して呉れたが、私は、

「一人で飯を食ふくらゐ、どうにでもなるさ」

と平氣であつた。虚勢を張つたつもりはない。妻と離れて暮すのに、私は慣れてゐた。私が津の支局長に赴任した直後に、裕子が東京の大学に合格して、吉祥寺にアパートを借りた。それ以来、妻は頻繁に東京へ出掛けた。妻の実家は中野にあり、母親が健在であつた。初めは娘の監督と世話が上京の口実だつたが、大学生の娘にそんなに手が掛る筈はない。だんだんに妻は東京の生活が愉しくなつて行つたのであらう。吉祥寺の商店街で趣味の陶器の店を経営する女性と知り合ひ、仕事を手伝ひ始めたのは、裕子の大学の最初の夏休みのことだつたらう。自分よりも若いその店主とよほど馬が合つたのか、間もなく妻は、九州の熊本へ仕入れに同行するまでになつた。そして一年余りが経つうちには、妻と娘は東京に、私は津に、と離れて住む形がいつとはなしに定着した。妻は二た月に一度くらゐの割で、津へ戻つて来た。

あまり世間態のいい事ではないから、私は人には話さなかつたが、内心はさして不満ではなかつた。新聞社の支局長の仕事は、地元の主立つた人びととの付合ひがかなりの部分を占

める。いきほ私の生活は外向きとなり、家庭の些事に意を用ゐるのが煩はしかつた。裕子が高校生になつた前後から、家庭は妻と娘とが相談をして一切を取りしきるやうになつてゐた。妻が東京に居付いてしまつたのは、さうした私に対する嫌りなさのせいでもあつた事は確かだが、私には、それなら別に暮した方がいつそ気楽だといふ思ひが強かつた。

私が、津のあと奈良の支局長を経て、東京本社 of 解説委員となつたのと、大学を卒へたあと東京で勤めてゐた裕子の結婚が決つたのが、ほぼ同時であつた。そして私と妻とは、六年ぶりに一緒に暮しに戻つたのだが、その毎日には、やはりどこかぎこちなさが付き纏つた。夫婦ならば当り前の、意味もない会話が滑らかに交せなかつた。私は外で人に会つたときに、少しでも興味の持てる話を聞くと、これは今夜妻に話してみよう、と強ひて記憶に留めるやうな努力をし、その事に疲れた。

そんな風だつたから、私は妻の死後についても、要するに津や奈良の時分と同じになるだけではないか、と高を括つてゐたのである。しかし、私は甘かつたやうだ。妻の三回忌を済ませてまだまだ、一人きりで過す時間に慣れない。だらしない話だが、妻の存在を無意識に頼りにしてゐた事を、日々思ひ知らされてゐる。

解説委員としての私の担当は、毎週水曜日の夕刊に載せるコラムである。欄の名を「南船北馬」といふ。私の書くものは、時事問題には減多に触れない。季節の話題や巷での見聞

を、出来るだけ軽い調子で筆に上せ、いささかの個人的な感想を添へる。それに月に一度くらゐ、注目される人物にインタヴューをするのが、私の仕事のすべてである。羨ましい身分だと皮肉られさうだが、地方支局廻りに生涯の大半を費し、定年を一年半後に控へた老骨に、この程度の氣儘勤めは許されてもいいだらう。もともと新聞社といふところは、五十歳を越した人間がまともに勤まる職種がさう沢山はないのである。

月曜日には私は出社しない。自宅にゐて原稿を書き、翌火曜日の午前中に提稿するのが通常の例である。月曜の朝は、ほかの日よりも一時間ばかり早く起きる。温めた牛乳をモーニング・カップに一杯飲んで二階の書斎に入るのだが、腹案が出来てゐて机に向つても、直ぐ筆を持つ氣にはなれない。三種類の新聞に叮嚀に眼を通したあと、書くつもり of 事柄に關係のありさうな本を取り出し、あちこちと頁をはぐつて、思付きをメモに書き留める。わけもなく興が乗らない日、題材がしつくりと来なくてうまく書けさうもない日には、竿竹売りのマイクの声が近付いてはまた遠ざかり消えて行くのを、本に眼をやつたままぼんやりと聞いている。「お前さんののは彫心鏤骨の文章だからな、いや立派だよ、ぶん屋風情には勿体ねえよ」と私が原稿を書いてゐる傍に突立つて、周りに聞えよがしに言つた支局長のいらいらした表情を、今でも時どき思ひ出す。かつては、物も考へずに書き飛ばす記事なんぞ紙屑を作つてゐるに等しい、俺は記者らしくない記者になつてやる、と秘かに氣負つた覚えがある。

だが、さうした若い日は遙かに遠くなり、今は、逡巡したあげくなくては筆を執れない悪癖だけが遺つてしまつた。

こんな癖が身に付いたのは、私が修羅場をくぐり抜けてゐない事とも関係があるかも知れない。私は初めから新聞記者志望ではなかつた。大学を卒業して直ぐに教養書専門の出版社に勤めた。仕事を覚えてゆくゆくは独立するのが、二十代の初め私のささやかな志であつた。しかしその出版社がつぶれてしまつたため、仕方なく伝を頼つて新聞社に入つたのである。既に二十七歳になり、結婚もしてゐた。途中入社社員が主流に加はつて出世する事は、先づ不可能に近い。私も例外ではなかつた。東京社会部の遊軍に二年足らずゐたあと、地方支局へ出され、関西から四国へかけての四つの支局を廻つた。高松で初めて支局長になるまでの十三年間に、私は、日々のニュースに直接関はりのないはゆる閑種を書く要領を覚えた。地方版ではその種の記事が占める比重は大きいのである。今年は例年になく桜の開花が早い、市立大学の名物男だつた守衛が死んだ、少年野球に十歳のヒーローが誕生した。さうした大して変り栄えのしない町の話題を、少しばかり気取つた文章で書くのが、私の愉しみとなつた。

津の支局長を命じられたのは、四十九歳の時であつた。偶然、父親の死んだのと同じ年齢だつたので憶えてゐる。三度目の支局長勤めである。典型的などさ廻りの道を、私は辿つて

ゐた。だから私が、津の次の奈良を短期間で切り上げ、編集局付といふ形で東京へ戻つて、やがて解説委員となると、大抵の人が意外さうな顔をした。「異例の人事ですね、正直なところ吃驚しました」と人事部長が言つた。「今の局長は以前からあなたの書く続き物に注目してゐたから、それで推したんでせうかね」。本社編集局長とは、彼が中部支社長の時代に、たまに家を訪ねて飲む程度の付き合いがあつた。私の書いた「郷土の百年」と題する連載記事を賞められたのも事実である。私は才能を認められて抜擢されたのだつたらうか。さうかも知れない。だが、厖大な人員を抱へる組織の人事異動は、駒の捌き具合一つで、傍目には異色と映る結果が転がり出る事も、私はよく知つてゐる。

内情はともあれ、東京転勤は朗報であつた。妻も欲んだと思ふ。娘が結婚してしまへば、妻は東京のアパートに取り遣される。そこで一人の暮しを続けるのは本意ではなかつたらう。何等かの形で私と折り合ひを付けなくてはいけなかつたのだが、その機会が自然にやつて来たといふわけだ。まさかあと僅か一年足らずしか生きられないとは、思ひもよらなかつただらう。

原稿は正午までには一応書き上る。私は階下へ降りて、テレビのニュースを見ながら簡単な食事を済ませる。アナウンサーが話しかけるやうな調子で身を乗り出す度に、一いち頷くのがいつの間にか癖になつた。初めは自分で氣にして、姿勢を正して坐り直してみたりし

たものだが、最近はそれも止めてしまった。

汚れた食器を水に漬けておいて、散歩に出掛ける。どこを歩くかは一定してゐない。私鉄の踏切を越えて商店街を抜け、図書館をのぞいてみる日がある。踏切と逆の方向へ坂を下り、川のほとりの桜の木立のある公園まで足を延ばす日もある。陽気のいい季節には、公園の入り口に近い場所に、飲み物やアイスクリームを売る店が出てゐる。たまに子供を連れた母親が立ち寄るほか、あまり客の姿を見かけない。その店の番の爺さんと、私は何となく顔馴染になつた。

「お互ひさま、閑だねえ」

と、いつだつたか爺さんが言つた。

「一日中遊んでるわけぢやないぜ」

私は思はずむつとして言ひ返し、あとで自分を嗤つた。

散歩から帰ると原稿に手を入れ、続いて清書をする。私の書斎は東と南に大きく窓が切つてあつて、冬の晴れた日には机の上まで光が射し入る。週に一度、掃除と洗濯に通つて来る家政婦は書斎に入れないから、書棚や床をうつすらと埃が覆つてゐるのはいやでも眼に付くが、そんな事は気にならない。昼も夜も、室内は眩しいほど明るいのがいい。

仕事は遅くとも四時までには片付く。原稿を鞆に収め、ソファに寝転んでほつと一と息吐

いて、長い一日がやうやく終つたやうに感じる。たつた六十行を書くのに何と大袈裟な、と言はれさうだが、仕方がない。金曜が担当の真柄は、提稿日の午前中に、一時間足らずで六十行を書き上げる。終ると読み返しもせずに、

「よし」

と声を出して立上り、原稿を整理部へ持つて行く。声の大きいのに比例するやうに、仕種もすべて大きい。

經濟部育ちの彼は、私より半年遅れて解説委員室へ来た。初めて顔を見せた日、彼は隣席の私にろくに挨拶もしないで、外部の雑誌に頼まれたらしい原稿を書き始めた。二時間ばかりすると不意に鉛筆を投げ出し、私の方を向いて、

「どうです。飯を食ひに行きませんか」

と言つた。連れて行かれた中華料理屋で、私は、彼が先ごろ経済使節団に随行して訪れた中国の話をさんざん聞かされた。磊落を装つてはゐるが自己顯示欲の塊みたいな男、といふ印象が私がつたのは、已むを得なかつただらう。しかし付合つてゐるうちに、必ずしもさうではなく、文学や絵画に興味を持ち、周囲への氣遣ひも人並み以上にする人間なのが判つて来た。私の書く記事も精密に読み、不審の点があると、「異見あり、御参考までに」と書いたメモを寄越したりする。私は彼の意見に承服する場合が多かつた。彼に釣られて、本を